

《ぎし、ごそ……ばさ》

（ベッドの軋む音、ノラの起き上がる音、毛布が落ちる音）

ノラ

「んあ……。あつ、つう……。くそ、いつてえ。……腹、減ったなあ。
ん？ あれ、……てか？ ここ……何処だ？」

《ごそ……どさ》

（食べ物をテーブルへ置く音）

ぎしりと軋む音を立てながら、胸に掛かっていた毛布を掴んで少女が目
を覚ます。

その音に床に毛布を敷き、ごろりと横になって眠っていた貴方も気付
き、瞼を上げる。

そして食うや食わずでいたためか、血の巡りの悪い様子でぼんやりと辺
りを見回している少女の意識がはっきりする前に、昨日の内に買ってお
いた朝食を雑にテーブルへと広げ、それから

【おはよう】

と貴方は声を掛けた。

ノラ

「ふえ？ ん……んんう？

……んな！ ?あ、あんた昨日のおっさん！?

ひっ……な、何だよオレを捕まえたのかよ!? ここ何処だよ!?

つて、あ！？さ、財布……オレの財布！？」

《ばさっ、ばさ、ばさっ》

(慌てて体をまさぐる音)

【お前のじゃないだろうが……】

と、貴方を見て意識をはっきりさせた少女に、呆れるように言葉を投げかける、貴方。

少女が警戒するように毛布をかき上げるのを見ながら、スった財布が手元のない事に慌てているのを横目に、貴方はため息混じりに広げた朝食を食べ始める。

ノラ

「うあ……うまそう……ごくっ」

……って、そうじゃねえ！？ お、オレが一度手にしたんだから、アレはオレの物でいいじゃねえか！

少しばかり飯を食う金を恵むつもりですよ！

てか、その……なんだ、うまそう……ごくっ」

貴方の様子に……いや、今まさに口に運ばれている食べ物に目を吸い付かせてしまう少女。

気まずそうにしながらも強情に叫ぼうとする彼女だったが、目の前で無遠慮に減っていく食べ物から目が離せず、声に勢いがなくなっていく。いつそ、切ないとすら言えそうな顔で食べ物をじっと見つめているが、

貴方を警戒してか、近付いて来ようとはしない。

その警戒ぶりに思わず、拾った野良猫が威嚇でもしているような思いを抱き（いだき）ながら、小さく呆れたようなため息が、また一つ。

そして仕方ないと、手付かずのパンを一つ掴むと、少女が座り込んでいる貴方のベッドへと放り投げる。

ノラ

「うわっ！？　な、何すんだよ！？

って、これ……パン？！　な、なんでオレに……ど、どういうつもりだよ！

まさか、眠り薬とか何か入れてるんじゃないだろうな！？　それで、オレに……妙な真似をつ！」

手元に降ってきた食べ物に声が高くなりながらも、それでもまだ少女は警戒するように貴方を睨む。

どうしようもないな……と、少女のあまりの警戒心の高さに頭が痛くなるのを感じながら、

【お前をどうにかするっていうなら、家に連れ帰った時点ですてる。そいつは多めに買ったものだから、喰いたければ喰え。いらなきや、あとで自分で食うだけだ】

……と、それだけ言って、それ以上少女に意識を向ける事もなく黙々と自分の食事を取る、貴方。

少女はその言葉に、暫く躊躇うよう（ためらうよう）にパンを凝視して

いたが、恐る恐るという体（てい）で一口、パンに口を近付け、齧った。

ノラ

「つつ！！ んぐつ！ んつ、あむ……んつ、んつ！！」

一口食べれば、それがもう我慢の限界だったのだろう。

食欲のままに、行儀の良さなど欠片も知らないといった様子で、必死にパンを口の中へと押し込むように食べ始める少女。

その様子に、貴方は微苦笑を浮かべながら。

【急ぐと喉に詰まるぞ？ 水と、あとチーズとハムで良ければテーブルにあるから、それも食いたきや自分で勝手に切り分けてくれ】
……と、そう言って、そこにあるぞと軽く顎でテーブルの上を指し示す。

ノラ

「んうつ！？ んう、ん……んっ」

少女はその言葉にびくりと震え、再び警戒するよう……いや、困惑するように貴方に視線を向けたが、一度燃料を入れられた食欲は、もう押さえが利かないらしい。

取られまいとするようパンを抱えながら、じりじりとテーブルへと近付いていき、それから“あなた”が用意しておいた食べ物を一心不乱に食り続ける。

《がしっ！》

（食べ物をとる音）

ノラ

「んぐっ！ んっ、はむっ……んぐっ、んっ、んっ！
がぶっ……むしゃりっ！んぐっ……んんうっ、んっ！！
こくっ……んぐっ、んっ……こくこくっ……っぷはっ！」

最早止まらぬといった様子で、手が空くなり次の食べ物、次の食べ物を
と手を延ばし続ける少女。

だが、貴方の言葉は耳に届いてはいるようで、合間合間に水を口に含ん
では、また猛然と食べ続ける。

ノラ

「むぐうっ、はぐ、はぐっ……こく、こくこく……んっ、ぷはあっ！」

貴方はその野生の獣のような勢いに苦笑を濃くしながらも、何処か微笑
ましい物を感じ、彼女の邪魔をしないように、そのまま黙って自分の食
事を続けるのであった。